

『ドイツ語文化圏研究』 第19号 抜刷

2023年3月25日発行

(研究ノート)

柏原兵三の『ベルリン漂泊』について

—日本人留学生の目を通して見た

1960年代のベルリン—

**Über Kashiwabara Hyozos Erzählung „Berlin Hyohaku“**

**— Das durch die Augen eines japanischen Studenten**

**gesehene Berlin der 1960er Jahre —**

宮内 伸子

**Nobuko MIYAUCHI**

日本独文学会北陸支部

## (研究ノート)

### 柏原兵三の『ベルリン漂泊』について —日本人留学生の目を通して見た 1960 年代のベルリン—<sup>1</sup>

宮内 伸子

#### はじめに

柏原兵三（かしわばら・ひょうぞう）は富山にゆかりのある作家である。富山県立の たけのくに 高志の国 文学館には常設の展示コーナーがあり、柏原の没後 50 年を迎えた 2022 年には、企画展も開催された。<sup>2</sup>

柏原は 1968 年に『徳山道助の帰郷』により芥川賞を受賞したが、それから 2 年も経たないうちに 38 歳で急逝したこともあり、今ではその名を知る人はそれほど多くはないかもしれない。ちなみに柏原が芥川賞を受賞したとき、他に候補に挙がっていたのは丸谷才一、阿部昭、佐木隆三、勝目梓といった面々だった。彼らが生きた後、息長く健筆を振ったことを思うと、柏原の早世がいかにも惜しいものを感じられる。

本稿では、柏原兵三の代表作の一つである『ベルリン漂泊』を取り上げ、この作品を手がかりに 1960 年代半ばのベルリンの情景を想起してみたい。

#### 1. 柏原兵三について

本題に入る前に作家の生涯の概要を紹介しておこう。

#### 柏原兵三略年譜

1933（昭和 8）年：11 月 10 日、千葉県千葉市で誕生。

1944（昭和 19）年：縁故疎開のため、父の郷里、富山県下新川郡入善町の上原小

---

<sup>1</sup> 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会（2022 年 2 月 19 日、於：金沢）での口頭発表「柏原兵三の『ベルリン漂泊』について」に修正を加えまとめたものである。

<sup>2</sup> 「(開館 10 周年記念企画展) 没後 50 年 芥川賞作家 柏原兵三展」会期：2022 年 9 月 24 日～12 月 5 日

学校へ転校。この時の体験が後に小説『長い道』となる。

1954（昭和29）年：東京大学入学。文学部に進みドイツ文学を専攻。同大学大学院修士課程を経て博士課程1年にて退学（1962年）。

1963（昭和38）年：ベルリン自由大学へ留学。1965年帰国。

1968（昭和43）年：『徳山道助の帰郷』により1967年度下半期芥川賞（第58回）受賞。

1970（昭和45）年：『仮りの栖：ベルリン冬物語』など刊行。

1972（昭和47）年：脳出血のため死去（2月13日）。『ベルリン漂泊』など刊行。

柏原は1933年（昭和8年）、千葉県千葉市に生まれた。東京で小学校に上がるが、ほどなく父親の郷里である富山県下新川郡入善町に縁故疎開し、同地の小学校へ転校する。この時の体験を元に後に『長い道』という作品が書かれるが（発表は1969年）、「この時の体験」というのは、疎開先の小学校で受けた壮絶ないじめの体験なのである。

『長い道』は、1978年に藤子不二雄<sup>④</sup>によって『少年時代』というタイトルで漫画化され、その後1990年には映画にもなった。映画のタイトルも『少年時代』である。監督は篠田正浩、脚本は山田太一で、日本アカデミー賞を受賞した。井上陽水のヒット曲「少年時代」はこの映画の主題歌である。

柏原は東京都立日比谷高校を卒業し、東京大学を受験するが2年続けて不合格に終わった。一旦千葉大学医学部に入学するものの、文学への思い絶ちがたく、東京大学に入り直してドイツ文学を専攻した。千葉大学、明治学院大学、東京藝術大学でドイツ語教師を務める傍ら、翻訳も手がけ、フランツ・カフカやヨーゼフ・ロート等の作品を翻訳出版している。<sup>3</sup>

## 2. 『ベルリン漂泊』について

柏原はベルリンの壁が構築されてまだ間もない1963年から2年間、DAADの給費留学生としてベルリンで留学生活を送った。その時の体験が元になって、『仮

---

<sup>3</sup> カフカ『判決』『流刑地にて』、ロート『ラデツキー行進曲』、ヴォルフガング・ヒルデスハイマー『眠られぬ夜の旅』、ペーター・ヴァイス『両親との別れ』など。

りの栖：ベルリン冬物語』や本稿で取り上げる『ベルリン漂泊』といった小説、それから数多くの随筆が書かれた。<sup>4</sup>

『ベルリン漂泊』は雑誌「文學界」に1971年8月から翌年の1月まで6回にわたり連載され、作家の死後1972年4月に、文藝春秋から江藤淳<sup>5</sup>の解説を付して単行本として刊行された。

『ベルリン漂泊』よりも先に書かれた『仮りの栖：ベルリン冬物語』は、半年間の単身でのベルリン留学生活を描いている。ただし、描かれているのはもっぱら主人公の下宿の家主であるバッハマン夫人との日常的なやり取りで、留学の本来の目的であろうはずの研究のことにはまったくと言っていいほど触れられていない。

その昔、明治時代の森鷗外や北里柴三郎などの留学は、国家を背負っての公的な任務だった。鷗外は自身の留学生活を元に小説『舞姫』を書いたが、この作品は、「国家のため「器械的」に働いていた主人公が、異国の地で「まことの我」に目覚め、すべてを捨ててエリスとの愛に生きようとした（そして失敗した）物語であった。」<sup>6</sup>

昭和になり、第二次大戦後でも柏原より10歳ほど上の世代による留学生活を題材にした小説は、まだまだ深刻な趣を保っている。たとえば加賀乙彦、遠藤周作、辻邦生など1920年代生まれの作家によるいわゆる「留学小説」には、留学先での学業に緊張し疲れ果て、ついには心身に異常をきたすという悲劇的結末を迎えるものが多く見られる。

それらに比べると、柏原の『仮りの栖：ベルリン冬物語』や『ベルリン漂泊』は、内容が食えることや住まうことにほぼ終始しているため、発表当時、それまでの「留学小説」に対するアンチテーゼであり、暗黙の批判となっている、と評

---

<sup>4</sup> ベルリンでの留学生活を元に書かれた小説としては、この2作の他、腎臓結石での入院体験を綴った『小さな石の物語』、東欧への旅を描いた『クラクフまで』『パラトン湖』『カールスパートにて』、家族連れでの東ベルリン訪問の顛末を語る『ピクニック』などがある。『柏原兵三作品集』第6巻の解説を担当した谷口茂によれば、柏原の「留学もの」は、長篇3、短篇11を数え、エッセイ類は20を優に超えるという。

<sup>5</sup> 江藤淳（えとう・じゅん）（1933-1999）、文芸評論家。柏原とは日比谷高校で同級だったが、在学当時は親交はなかったらしい。

<sup>6</sup> 美留町（2010）：132頁。

されたほどだった。<sup>7</sup>

『ベルリン漂泊』は、作家本人と思しき主人公が、半年の単身での留學生活の後、妻子を呼び寄せて家族で住むための住居を探して、ベルリン中を歩き回るといふ内容の小説である。筆者は『ベルリン漂泊』というタイトルから、例えばヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』のように、何か抽象的な苦悩を抱えた孤独な主人公があてもなく街を彷徨し、それによってさらに苦悩が増して悩みが深まるような物語を予想した。ところが、確かに主人公は苦悩を抱えてはいるが、それは家族と住むための部屋がなかなか見つからないというきわめて明確で具体的な悩みであり、その問題がなかなか解決しない理由もこれまた明快で、小さな子供がいるためである。それに、確かに街をあちこちさまよい歩くが、これもまた紹介された物件が、街のあちらこちらに点在しているという単純な理由による。これが柏原兵三のベルリン「漂泊」なのである。

1歳の男の子がいる貧乏留學生夫婦に家具付きの部屋を貸してくれる家主など、なかなかいるものではない。そのため部屋探しは難航する。作者の柏原自身、部屋を見つけるまでに50以上の物件をあたってそうだが、物語の中でも、主人公の杉野潔が、20軒以上に連絡を取り、検分に出かけ、それがことごとく不首尾に終わる。部屋探しに翻弄されるうちに、部屋探しが自己目的化していく感があり、主人公自身もそれを自覚しているが、部屋探しは大手を振ってドイツ人の家庭を観察できる機会と前向きに考える。

家探しをして歩くということは自然にベルリンの地理に詳しくなることであり、普通なら決して覗くことのできないドイツ人の家庭の内部を、垣間見程度にせよ、覗き得るということだった。(205-206頁)<sup>8</sup>

以下、『ベルリン漂泊』に描かれた部屋探しの詳細を紹介していく。貸間についての、建物・間取り・室内の様子、家主の人となり、周辺地域などの克明な描写から、当時のベルリンの街や人々の様子が鮮やかに浮かび上がってくるのでは

---

<sup>7</sup> 小堀(1973):57頁。小堀はまた『柏原兵三作品集』第5巻の解説として「留學神話の打破」という文章を書いている。

<sup>8</sup> テキストからの引用は文藝春秋刊の単行本による。引用頁数のみ引用末尾に記した。

ないか。日本人留学生の目に 1960 年代半ばのベルリンはどのように映ったのだろうか。

### 3. 1945 年～1960 年代のベルリン

『ベルリン漂泊』の部屋探しの詳細に入る前に、当時がどのような時代であったのか、年表で簡単に押さえておきたい。

#### 1945 年～1960 年代ベルリン関連年表

- 1945 年：ソ連軍ベルリンへ突入，市街戦始まる（4 月）。ドイツ無条件降伏（5 月 8 日）。米英ソ首脳，ポツダム会談（7 月）。ベルリン，米英仏ソ 4 か国の共同管理となる。
- 1948 年：西側占領地区で通貨改革。ソ連がベルリン封鎖（6 月），西側は大空輸作戦（「空の架け橋」作戦）で対抗。市の行政東西に分裂。
- 1949 年：ベルリン封鎖解除（5 月 12 日）。ドイツ連邦共和国（BRD）誕生（5 月 23 日）。ドイツ民主共和国（DDR）誕生（10 月 7 日）。この年，東側から西側へ逃亡したドイツ人は 12 万人強。
- 1953 年：東ベルリンで反ソ・反政府の労働者蜂起（6 月 17 日事件）。東独全域に抗議デモが広がるが，ソ連軍によりただちに鎮圧される。東独から西独への脱出者がいよいよ増加。
- 1955 年：西独は NATO，東独はワルシャワ条約機構に加盟。東西の溝深まる。
- 1956 年：ハンガリーで反ソ暴動。ソ連軍に鎮圧される。
- 1958 年：ベルリン危機。ブランデンブルク門のカドリガを再建。
- 1961 年：東独，ベルリンの壁の構築に着手し，交通を遮断（8 月 13 日）。
- 1963 年：ケネディ米大統領が西ベルリンを訪問し，„Ich bin ein Berliner.“と宣言（6 月 26 日）。
- 1964 年：好景気を受け，西独に外国人労働者が急増。
- 1967 年：国民総生産がゼロ成長となり，西独の「経済の奇跡」終わる。
- 1968 年：「プラハの春」（8 月）。ワルシャワ条約機構軍介入。東独軍，ソ連軍と共に武力介入。

第二次世界大戦末期、ヒトラーがなかなか降伏の決断を下さなかったため、首都であったベルリンにソ連軍が突入し、市街戦となった。『ベルリン漂泊』に次のようなくだりがある。

「わたしなんかでも、こうやって、大切に亡くなった夫と息子と一緒に写した写真を肌身離さず持っているけれどもね」そういって女は首にかけたネックレスの先のロケットをいじって見せた。(中略)彼女が見せてくれたロケットには、虫眼鏡がないとはっきり分らないような小ささであったが、ナチスの制服を着た若い男と、すでに少し肥満の傾向を見せた女と五、六歳の男の子の写真が入っていた。(中略)「戦死されたのですか」「一九四五年にね。それからわたし一人で息子を育てたんだが、ずい分苦労したものだよ」(51-52頁)

女の夫がベルリンの市街戦で死んだのかどうかははっきりしないが、終戦の年に彼女の夫は戦死し、未亡人となった女は部屋を貸すなどして生計を立てているのである。

市街戦となった結果、ベルリンの多くの建物が破壊されたばかりでなく、レイプ事件も頻発したことが伝えられている。次のくだりは、ある家主(男性)の発言だが、ソ連軍がベルリンに侵入してきた頃の状況が彼の念頭にはある。

「あんたが家を留守にしなくてはならない時も、わたしがいるから奥さんは安心だ」と再び老人はいった。「たとえロシアが侵入して来ても、わたしがいれば大丈夫だ。ちゃんと守って上げるよ」老人が妙なことをいい出したので、私は驚いて彼の顔を見た。しかし別に彼が冗談をいっているような様子もなかった。(266頁)

柏原自身が苦労したあげくにやっと見つけた貸間の家主一家の中にもレイプ被害者がいたらしい。その女性の過酷な運命に触れた作品も柏原は書いている。<sup>9</sup>

---

<sup>9</sup> 『贈り物』(初出:「文學界」1969年1月号)

戦争が終わって、ドイツは米英仏ソの4か国に占領され管理されるが、次第にソ連占領地域とそれ以外の地域との間で分裂していき、結局西ドイツと東ドイツの2つの国として独立することになる。首都だったベルリンも東西に分断され、西ベルリンは東ドイツの中に浮かぶ孤島のような存在になってしまう。

その後、東西ドイツ間の経済格差から東側から西側へ大勢の人々が逃げ出す事態となり、1961年にベルリンの壁が構築される。

柏原がベルリンで暮らし始めたのは1963年11月のことだから、上で示した年表でいうと、ケネディ米大統領が西ベルリンを訪問し、„Ich bin ein Berliner.“という一節を含むあの有名な演説をした数か月後にあたる。

その翌年の1964年には、「好景気を受け、西独に外国人労働者が急増」という状況となる。『ベルリン漂泊』にも、イラン人が家主である壁の近くの家を検分に行く場面がある。

作品中に出てくる物件の大部分は、現在のベルリン12区でいうと西南の端にあるシュテューグリッツ・ツェーレンドルフ区にある。これは主人公の通うベルリン自由大学がこの区に位置するため、大学に近い場所に住まいを求めたためだろう。

#### 4. 部屋探しの詳細

主人公の部屋探しの手段は、大学の下宿斡旋所と新聞広告が中心である。新聞広告の方は、掲載された貸し物件をチェックするだけでなく、自分からも「貸間求む」の広告を出す。ただし広告掲載には30~40マルクかかるため、DAADから月に500マルク（妻が来ると100マルク加算されて600マルク）給付されるだけの貧乏留学生の身ではそう何度も出せるものではなかった。

当時のベルリンの住宅事情は、ドイツの他の都市に比べると悪くはなかったらしい。作品中に次のような会話が出てくる。

「今ベルリンの住宅事情はいいのでしょうか」と私は聞いた。

「ほかの都市に比べれば、まあまあというところじゃないですか。ただベルリンにはほかの都市のように郊外というものがいないから」と金氏も、バッハマン夫人やヴォーマン氏と同じことをいった。(64頁)



主人公は「短期即決主義で行くつもりで」(3頁)、3月2日に大学の下宿斡旋所に初めて足を運び、部屋探しを開始する。家賃の予算は月額200マルクまで、希望するのは、庭のある一戸建て住宅(いわゆるヴィラ)の中の家具付きの2部屋続きの物件である。

3月2日から30日までほぼ連日、主人公は部屋探しの活動をする。そのあらしを日付順に以下に一覧にしてみた。斡旋所に行ってはみたものの適当な物件が1つも見つからない日もあれば、1日のうちに複数の物件を検分に出かけた日もある。

**部屋探しの詳細(1964年3月、物件の概要(家主、月額家賃、場所など):結果)**

- 3月2日(月)2台のベッド付きの1部屋、女子学生2名を希望:電話をかけてみると、かなりの年配らしい女性が応答し、子供がいることを理由に断られる。
- 3月3日(火)男子学生2名を希望の物件、120マルク:電話をかけてみると、1時間前にすでに決まっていた。
- 3月4日(水)1部屋半の家具付きの物件、築80年以上と思われる古びたアパートの4階の1部屋と3階のごく小さな部屋、80マルク、リヒターフェルデ・ヴェスト区、家主は腰の曲がった老婆:一足ちがいで借主が決まっていたが、今後の参考のために部屋を見せてもらう。
- 3月5日(木)下宿斡旋所に行くが収獲なし。
- 3月6日(金)下宿斡旋所に行くが収獲なし。
- 3月7日(土)下宿斡旋所に行くが収獲なし。
- 3月8日(日)古びた5階建てアパートの最上階の2部屋、クアフルステンダムの近く、家主は50歳位の戦争未亡人、一人住まいだが息子が時々遊びにくるという:一足遅く、前夜のうちにアメリカ人夫婦にすでに決まっていたが、参考までに部屋を見せてもらう。子供がいても問題なかったと言われる。
- 3月9日(月)キリスト教団体の学生寮の夫婦室、120マルク、ティール広場から地下鉄で2つ目の、つまり終点クルメ・ランケの1つ手前の駅から徒歩10分:寮の主事夫人に寮の中を案内してもらう。2日後の11日に選考面接を受けることになる。

- 3月10日（火）新聞広告への応答の物件。グルーネヴァルト区（緑の多い高級住宅地）、大邸宅の中の立派な家具付きの部屋、子供がいても可、日本の大手新聞社の特派員が住んでいたことがある。家主は60歳くらいのやつれた老婦人：家賃が月ではなく週200マルクと検分時に判明し諦める。
- 3月10日（火）新聞広告への応答の物件。一種の廃屋で家具なし、250マルク、ティール広場から地下鉄で3つ目の終点クルメ・ランケから車で2分くらい、不動産斡旋業のヴォルフと名乗る男が案内する：すぐ後に検分に来た二人組の俳優の若い男たちがこの家を気に入ったらしいので、主人公は短期滞在の自分には不向きだと言って譲る。
- 3月11日（水）：キリスト教団体の学生寮の選考面接、全8組の応募者で、世界平和についてフリートーキングをする：選に漏れた旨の手紙が14日に届く。
- 3月12日（木）東ドイツとの国境近く、大学から2時間半、ベルリンの東南のはずれにあるルードウ区の一帯、場末という感じの場所、140マルク、暖房はガスストーヴのみ、40歳位の顔色の悪い男とその60代の母親が家主、子供がいても構わない：大学から遠すぎるのと、住めるようにするためにはかなりの費用がかかりそうなので、主人公の方から断る。
- 3月13日（金）来客のため部屋探しはせず。
- 3月14日（土）アパートの中の2間続きで、2人の学生可、ツェーレンドルフ区、眼鏡をかけた神経質そうな若い女が家主：電話をかけてから訪ねていくと、「今さっき決まってしまった」と言われる。主人公は、白人でないことがわかったため断られたのだと思う。
- 3月15日（日）かなり立派なアパートの3階の2間続きの部屋、240マルク、リヒターフェルデ・ヴェスト区、家主はシュティルペ夫人という60代の未亡人、3人の子供は戦争でロシア人に殺されたという。以前日本の大手新聞のハシモトという記者が住んでいたことがある：子供がいることを伝えると断られた。
- 3月15日（日）ベルリンの壁近くの一軒家、160マルク、壁が近いので周囲は無人の家が多い。荒涼とした廃市のような雰囲気。イラン人の織物卸商ハッサン・ハビブが家主。トルコ式の水洗でないトイレに主人公はショックを受ける。その日の夜中にハビブが電話をかけてきて、カーテンと絨毯をつけ寝具代込みで180マルクにすると言う。しかしやはりトイレと壁が問題。再度ハビブから電

話があり、洋式便所に改造してもよいと提案されるが、返事を保留する：翌日にも電話があり返事を催促されるが、結局 17 日に、トイレもそのままよいという借主が現れたとハビブから断りの連絡が入る。

3月16日(月)古いアパートの4階,160マルク,ティール広場から地下鉄で北へ2つ目ポトビルスキー・アレー下車,徒歩10分,シュメラ一家,老婆という感じの60歳位の肥った女とその母親が家主。戦前に日本人を何人も下宿させたことがあるという。グランドピアノのある20畳くらいの大きな部屋:1歳児がいるということで断られる。

3月17日(火)2台ベッドがあって夫婦学生可のアパートの1室,ツェーレンドルフ区:電話をかけ検分に行くと,眼鏡をかけた神経質そうな若い女が出てきて,主人公は14日におそらく東洋人という理由で断られた物件であることに気づく。そして今回も「今さっき決まってしまった」と断られる。

3月17日(火)煉瓦造りの古い穴蔵のようなアパート,戦災に遭った建物を戦後修築,ヴェディング区(工場の多い街,街路樹以外には緑がない),家主はレストランの主任をしている女:1歳児がいると伝えたところ断られる。

3月18日(水)下宿斡旋所に行くが収穫なし。2回目の新聞広告を依頼する。

3月18日(水)不動産屋ドクター・ヴァルター・フランクで紹介された2件。グルーネヴァルト区のアパートとツェーレンドルフ区の一軒家:電話をかけてみると,2件とも他の不動産屋を通してすでに3か月も前に借主が決まっていた。

3月19日(木)部屋探しはせず。

3月20日(金)部屋探しはせず。

3月21日(土)部屋探しはせず。

3月22日(日)部屋探しはせず。

3月23日(月)一軒家の中の2台ベッドのある部屋,ダーレム区,フェルマー家,家主は無精ひげを生やした70歳くらいの老人。昔は相当立派な邸宅だったようだが,見る影もなく荒れ果てている。昔の屋敷を分割して8家族が居住:1歳児がいると伝えたところ断られる。

3月24日(火)新聞広告への応答の物件。古いアパートの2階,広くて上等な貸間,270マルク,シュテータグリッツ区,家主は87歳のフォーゲル夫人,5人の子供は皆独立し,女友達と2人で住んでいる:1歳児がいると伝えたところ断

られる。

3月25日(水) 新聞広告への応答の物件。第二次大戦開戦時よりもさらに何十年も前に建てられたような古臭い陰気な建物の4階の2部屋、180マルク、クアフルステンダムから地下鉄に乗りヴィッテンベルク広場で乗り換え、1駅目のノレンドルフ広場で再度乗り換えて、1駅目のヴィクトリア・ルイーゼ広場から徒歩5分、家主は70過ぎの男やもめの老技師フリードリヒ・ゲーデケ氏：子供がいても問題ないと言われるが、部屋がひどく不潔で、さらに家主の好色そうな表情が気になり、後で断りを入れることにする。29日に電話してみると、ゲーデケ氏は心臓発作で亡くなっていた。

3月26日(木) 部屋探しはせず。

3月27日(金) 新聞広告への応答の物件。瀟洒なヴィラの中の部屋、580マルク、グルーネヴァルトの高級住宅地、家主はルイーゼ・フェルスター夫人という50過ぎのやせぎすの有閑未亡人。子供嫌い。ブラジル人夫妻が退去すると言いつつ一向に出て行かないため、出ていかせるための次の住人の募集だった：家賃が高額なのとブラジル人夫婦がいつ実際に退去するのか危惧されるため、もし借りることにするなら2、3日中に連絡すると伝えて実質断る。

3月28日(土) 新聞広告への応答の物件。アパートの4階、シャルロットンブルク区、クアフルステンダムから徒歩10分、建物は古い部屋はすばらしい、150ドル(600マルク)、1年前前納。家主は50過ぎのインゲボルク・キュメル夫人とその夫。夫人は発声術教師、夫は貿易商。夫婦で1年半ニューヨークへ行くので、その間の賃借人探し。子供は不可：妻と相談のうえ返事をすると即答は一応避けて帰る。翌日、ニューヨーク行きが取りやめになったと家主の夫の方から断りの連絡がある。

3月29日(日) 部屋探しはせず。

3月30日(月) 弁護士事務所の奥が下宿になっている、アパートの中のベッド2台の部屋、170マルク、クアフルステンダム周辺、家主は70歳くらいのシュルツ夫人、穴蔵みたいだが清潔：1歳児がいると伝えると断られた。

主人公が希望しているのは庭付き一戸建て住宅(ヴィラ)の中の貸間だが、希望通りの物件にはなかなか巡り会えず、アパートの中の貸間も何軒も検分に行っ

ている。

ちなみに、ベルリンの街に高層の集合住宅が建設されるようになったのは 19 世紀に入ってからで、急激な人口増加が背景にある。19 世紀前半では 4 階建てが標準で、トイレは建物の中にはなく裏庭 (Hof) にあった。排泄物は窓から道路や裏庭に向かって捨てるのが通例だったが、自然の浄化作用の範囲内に収まっていた。ベルリンの人口はさらに増加を続け、19 世紀後半には 100 万人を突破する。それに伴い集合住宅もさらに大型化し 5 階建て以上が標準となり、悪名高い Mietskasernen (兵舎のような粗悪な賃貸アパート) が出現する。最貧困層の中には、まだ湿気のある新築の建物に住んで、これを乾かすという条件のもと、低家賃ないしは半年間ほど無料で居住する人たちもおり、Trockenwohner と呼ばれた。健康にはきわめて有害なことだった。

Mietskasernen が規制されるようになったのは 1925 年なので、西ドイツの他の都市に比べて戦後の復興がなかなか進まなかったベルリンには、『ベルリン漂泊』の頃はまだそのようなアパートが少なからず残っていたようである。

行ってみて分ったことだがウェッディング区は工場の多い街だった。指定された番地の近くは街路樹のほかに緑がまったくなかった。指定された番地には予想通りアパートがあったが、煉瓦造りの古い建物で、明らかに戦災に遭ったのを戦後修築して使っているものだった。(184 頁)

老技師ゲーデケの住いのあるアパートの建物の玄関の前に立ったのは、それから四十分後の八時四十分だった。建物は戦前、それも第二次大戦が始まった時よりも何十年もさかのぼって建てられたような古臭い陰気な建築物だった。(中略) 中央暖房のないアパートらしく、数分後には消えてしまう薄暗いドイツ式の電燈が照らし出す、剥き出しのコンクリート壁 (ということはどうも空襲で焼いた建物を復旧して使っているアパートらしかった) の階段は冷え冷えとして寒かった。(260 頁)

3 月 10 日には 2 軒の検分に出かけているが、1 軒目はグルーネヴァルト区の大邸宅だった。この地区は緑の多い高級住宅地である。

ヴァルター・ベンヤミンは『1900年頃のベルリンの幼年時代』の中で、自らが生まれ育った、ティーアガルテンの南に造成された西区という新興高級住宅街のことを書いている。<sup>10</sup> ベルリンは歴史的に見て、街の中心が東から次第に西へ移動していった都市で、<sup>11</sup> 『ベルリン漂泊』に出てくるグルーネヴァルトなどの高級住宅地もその流れに沿って19世紀以降に造られたものだろう。主人公は何軒かそのような邸宅（ヴィラ）の中の部屋を検分に行っているが、たいてい家主は老婦人で、その多くは未亡人であり、屋敷の部屋を貸間にするこゝで収入を得ようとしている。アパートの貸間の場合も家主は戦争未亡人など高齢女性がほとんどである。

家主に未亡人が多いのは、高齢女性は貸間をする以外お金を稼ぐ手段がまずなかったせいもあるが、壁が構築された頃のベルリンは老人、とりわけ戦争未亡人の多い街だった。壁に囲まれているせいで、製造業などの原材料を搬入するにしても容易ではない。その結果、工場などの職場が少なく勤労世代には住みにくい。そのため若い人を呼び寄せようと兵役免除などいろいろな政策が採られていた。

3月14日に訪ねていった物件では、あからさまではないにせよ、白人ではないといった人種差別的な理由で断られているが、このようなケースは例外的である。主人公はこの同じ物件をうっかり3日後の3月17日にも訪ねていき、初回と同じく「もうすでに決まった」という口実で断られるという目に遭っている。ただし、一般的には下宿人としての日本人の評判は良かったことが、次の2つのく

---

<sup>10</sup> 「ベンヤミンは一八九二年七月十五日に、十九世紀後半に高級住宅地として開発された、ベルリン旧西区（いわゆる「ベルリンW」、ティーアガルテンの南側一帯をいう）のマクデブルク広場四番地で生まれた。なお、ベルリン西区の中心はこの頃以降、一八八〇年代にこの地のさらに西方に建設された、クアフルステンダム界限（新西区、いわゆる「ベルリンWW」）へと、次第に移っていく。」（ベンヤミン（1997）：472頁、浅井による訳注）

<sup>11</sup> 辺境の小さな町だった中世のベルリンは、近代に急成長を遂げる過程で、西へと中心を移していく。都心の移動と並んでベルリンに特徴的なのは、常に都心を2つもつ双子都市である点である。最初、古ベルリンとケルン地区の双子都市だったが、街の発展につれ西側のフリードリヒ街とウンターデンリンデンに新しい中心ができて、元からのベルリンと新ベルリンの双子都市となった。そして20世紀に入り、さらに西のクアフルステンダムにまた新たな中心が形成された。2つの都心が町の拡大とともに移動していくのは、パリやウィーンなどには見られないベルリンという都市の特徴である。

だりからもわかる。1つ目は、「貸間求む」の広告を出すときに受けたアドバイ  
ス、2つ目は貸す側のドイツ人の発言である。

日本人の学生夫婦と、日本人の、とわざわざ入れた理由は、日本人は温和し  
くて清潔な住み方をするから、ベルリンでは部屋を貸す側から歓迎されてい  
る、だから新聞広告にはかならず入れた方がいい、と桐本医師から聞かされ  
ていたからだった。(15頁)

日本人は下宿人としては理想的だと聞いたので、つまり清潔に住み、温和し  
く、優しいということをおとところて聞いた矢先だったので、あなたの広告  
を見てすぐ手紙を出したわけなのだ。(286頁)

3月15日には壁近くの家も検分に行っている。壁に近いので、周囲は無人の家  
が多く、「荒涼とした廃市のような感じが濃厚に漂っている」(152頁)と描写さ  
れている。壁のできる前は「ベルリンの中心地で、最高に便利なところだった」  
(166-167頁)あたりが壁のせいで「荒廃化」しているのである。

大体そのあたり一帯は人の住んでいない家が多かった。住んでいても外が寒  
いので家の中にももっているのか子供の姿も全然見あたらない。煙突から煙  
が出ていたり、カーテンの蔭に人の動きが見えたり、家の前に停っていた自  
動車に人が乗り込み走り出したりするので、人が住んでいる家があるとい  
うことが分る程度である。要するに荒涼とした廃市のような感じが濃厚に漂っ  
ている一帯だった。その理由はもちろんその地帯が壁に接しているために違  
いなかった。壁はまるで疫病の発生源のようにあたりを荒廃化しているのだ  
った。(152頁)

この壁近くの家を検分で訪れて、主人公は以前ベルナウアー通りを見た時のこと  
を思い出す。

嘗て大学の同僚である大楽教授がベルリンに来た時に、一緒に観光バスに乗

って見せられたベルナウアー通りの陰惨な光景を私は思い起した。それは建物自体が壁となり、窓にはすべて煉瓦が詰められてしまっている通りだった。それらの建物の下にはところどころに、一九六一年の八月突然東西が遮断され、壁が構築されると、尋常の出入口から逃げるができないで、建物の窓から跳び降りて墜死してしまった人を悼む十字架があり、その前にはかならず花輪が供えてあった。バスから降りてその通りに立った時、私は巨大な前衛芸術の作品の前に立たされているような錯覚に襲われたものだった。煉瓦によって完全に塞がれている窓は、窓の機能を失った窓、盲いた窓というべきものだった。それは太陽の光をもう入れることもできない、外の景色を眺めることも拒絶した窓の死骸だった。それは人間同士の心の交流が稀薄になって行くばかりの現代の運命を象徴した見事な芸術作品といってもいいようだった…… (152 頁)

検分に行った日の夜遅くに家主のイラン人が電話を寄越し、カーテンや絨毯などをつけるから借りると言ってくる。しかし主人公にとってはやはり壁が問題である。とりわけ子供の心の形成への影響を心配する。

それに環境も気に入らない、と私はすぐいった。すると彼は、すでに何度もいったように壁などは何でもない、住んでしまえばあつてなきが如しの存在になってしまう、それにあの場所は壁ができる前はそれはいいところだったのだ、文字通りベルリンの中心地で、最高に便利なところだったのだ、そんなところにすぐ住める一軒家を、あんな安い家賃でそう易々と借りられるものではない、と力説した。(166-167 頁)

『ベルリン漂泊』の頃からは 10 年少しくらい後になるが、イギリスのロック歌手デヴィッド・ボウイが、ベルリンの壁にほど近い場所に数年滞在していた。<sup>12</sup> 分断された街に住んで、「初めてだよ。緊張が自分の内側じゃなくて、外にあつ

---

<sup>12</sup> ボウイは 1970 年代後半の数年間ベルリンに滞在し、創作活動を行った。彼のアルバム『ロウ』『ヒーローズ』『ロジャー』は「ベルリン三部作」と呼ばれる。



たなんて」とボウイは語っている。<sup>13</sup> 街を不自然に分断する壁を目の前にして暮らすというのは人に緊張を強いるものである。

3月19日からはさすがに疲れて主人公は4日間ほど部屋探しの活動を休むが、23日に妻から手紙が届いて気力を取り戻し、部屋探しを再開する。だからといって事態が急転直下に好転するわけでもない。

3月25日には珍しく子供がいても構わないという物件に出会うものの、部屋が不潔で家主がどうにも怪しい雰囲気漂わせているので、主人公の方から断ってしまう。

その後も部屋探しは続くが、結局住まいは見つからないまま物語は幕を閉じる。

## 5. 『ベルリン漂泊』から浮かび上がる1960年代半ばのベルリン

以上、『ベルリン漂泊』に描かれた1964年3月の部屋探しの様子をたどり、柏原の詳細な描写を手掛かりに、当時のベルリンの街やそこに住む人々の姿を思い浮かべてみた。浮かび上がってきたのは、現在の、あるいは1920年代の華やかな世界都市ベルリンの姿とはかけ離れた、うらぶれた寂れた街である。戦争の傷跡がそのまま残り、さらに東西を分断する壁ができたため、かつての街の中心地が無人地帯という異様な街である。そこに取り残されたように老人ばかりが住んでいる。

ベルリンはその特殊な立地条件から、フランクフルトなどの西ドイツの他の都市とは異なり、戦後の復興から取り残された街だった。そのうえ壁が構築されたために、上で引用したくんだり(166-167頁からの引用)にもあるように、かつてベルリンの中心地で最高に便利だったところが、荒涼とした廃市のような感じが濃厚に漂う一帯と化してしまった。また、「壁はまるで疫病の発生源のようにあたりを荒廃化している」(152頁)とあるように壁の存在が周囲に陰鬱な蔭を広げている。そんな街だから、住人は他に行く場所のない、ここに住み続けるしかない高齢者が中心となるのも不思議ではない。

『ベルリン漂泊』の主人公杉野潔は結局住まいを見つけられないまま物語は終わるが、作者の柏原兵三の方は、幸運にも最終的には良い物件と家主にめぐりあ

---

<sup>13</sup> ルター (2017) : 287 頁。

うことができ、その住まいでの暮らしを元に「ミーゲル家もの」と呼ばれるいくつかの短篇小説や随筆を書いた。<sup>14</sup>

部屋探しをする日本人留学生の目を通して見る街の姿は、主人公も言うように「普通なら決して覗くことのできないドイツ人の家庭の内部を、垣間見る程度にせよ、覗き得るといふこと」(206頁)であり、その観察結果がまた詳細に記されているため、当時のベルリンの街や人々の姿が臨場感豊かに目に浮かんでくる。柏原の文体は素直で銜いがなく、「緩り方みたいだ」と悪口を言う人もあったそうだが、<sup>15</sup> こうして改めて精読してみると、その豊かなイメージ喚起力に驚かされる。

### おわりに

筆者が柏原兵三の作品に興味を持ったのは偶然のきっかけによる。柏原兵三の原稿や書簡などの資料を見る機会があり、そこに自分が大学で教えを受けたドイツ文学の先生方の名前がたくさん出てきたのである。その中には筆者の卒業論文や修士論文の指導教員の名もあった。この年代のドイツ文学者は自分の師匠にあたる世代なのだと気が付いた。

私事で恐縮だが、筆者は2021年度末をもって富山大学を定年退職した。自分が定年を迎えるときに、自分の師匠世代のドイツ文学者でもあった富山ゆかりの作家の作品と出会い、時の流れや日本におけるドイツ文学の伝統に思いを馳せることになった。

柏原の作品には何とも言えぬユーモアが漂っている。トーマス・マンやカフカの筆致を思わせるところもある。彼の作品が再び多くの読者を得るようになれば幸いである。

---

<sup>14</sup> 『朗読会』『贈り物』『切手蒐集』など。これらは作品中の家主の名から「ミーゲル家もの」と呼ばれている。ただし、実際の家主の名はフリッケ家という。

<sup>15</sup> 小堀(1973):51頁。

## 使用テキスト

柏原兵三（1972）：『ベルリン漂泊』文藝春秋

## 参考文献

『柏原兵三作品集』全7巻（1973-1974）潮出版社

柏原兵三（2003）：『徳山道助の帰郷・殉愛』講談社文芸文庫

金子光男（2008）：『汚水処理の社会史：19世紀ベルリン市の再生』日本評論社

高志の国文学館（編）（2022）：『（開館10周年記念企画展）没後50年 芥川賞作家 柏原兵三展』（展覧会図録）

北村雅史（2020）：「住から見たドイツ史：木組みの家・賃貸兵舎・モダニズム建築」，所収：南直人/谷口健治/北村雅史/近藤修一（編）『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房，171-195頁

小堀敬一郎（1973）：「方法としての文体：『仮りの栖』『ベルリン漂泊』について」，所収：しんせい会（編）『柏原兵三の人と文学』（NS叢書），三修社，51-65頁

田中純（2021）：『デヴィッド・ボウイ：無を歌った男』岩波書店

平田達治（2010）：『ベルリン歴史の旅：都市空間に刻まれた変容の歴史』大阪大学出版会

美留町義雄（2010）：『鷗外のベルリン：交通，衛生，メディア』水声社

ヴァルター・ベンヤミン（1997）：「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」（浅井健二郎訳），所収：『ベンヤミン・コレクション3：記憶への旅』ちくま学芸文庫

前田愛（1982）：「BERLIN 1888」，所収：前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房

トビアス・ルター（2017）：『ヒーローズ：ベルリン時代のデヴィッド・ボウイ』（沼崎敦子訳）Pヴァイン

## **Über Kashiwabara Hyozos Erzählung „Berlin Hyohaku“ -Das durch die Augen eines japanischen Studenten gesehene Berlin der 1960er Jahre-**

**Nobuko MIYAUCHI**

Kashiwabara Hyozo (1933-1972) war ein Schriftsteller, der mit der Toyama-Präfektur in Beziehung stand. Da sein Vater ursprünglich aus Toyama stammte, zog er während der Kriegszeit von Tokyo nach Toyama um und besuchte dort eine Grundschule. Aus den harten Erfahrungen mit den Klassenkameraden in Toyama entstand später der Roman „Nagai Michi“ (Der lange Weg).

Kashiwabara bekam 1968 den Akutagawa-Preis, den berühmtesten Literaturpreis für Neuautoren in Japan. Zwei Jahre später starb er aber mit 38 Jahren.

Er studierte Germanistik an der Universität Tokyo und von 1963 bis 1965 an der Freien Universität Berlin. Er schrieb mehrere Erzählungen über seine Erfahrungen in Berlin. Nachdem er eine Weile allein in Berlin gewohnt hatte, wollte er seine Frau und sein Baby aus Japan nachkommen lassen. Er fing an, eine größere Wohnung zu suchen. In „Berlin Hyohaku“ (Das Schweifeln in Berlin) beschrieb er sehr ausführlich seine Zimmersuche; über die Vermieter, über die Zimmer, die Gebäude, die Gegenden usw. Sein Aufenthalt in Berlin fiel gerade in die Zeit nach dem Mauerbau 1961.

Weil er die Umstände sehr genau schrieb, kann man sich durch diese Erzählung die Situation im damaligen Berlin sehr gut vorstellen. In diesem vorliegenden Beitrag wurde versucht, sich anhand dieser Erzählung die Lebensumstände im Berlin der 1960er Jahre zu vergegenwärtigen.

Berlin war damals im Vergleich zu den anderen Großstädten in Westdeutschland wie etwa Frankfurt mit dem Wiederaufbau nach dem Krieg im Rückstand, vor allem wegen seiner speziellen Ortsbedingung wie eine einsame Insel inmitten der DDR.

Die plötzlich gebaute Mauer veränderte die Stadt gewaltig. Die frühere Stadtmitte wurde nun zum Niemandsland. Weil um die Stadt herum die Mauer stand, hatte Berlin, genauer gesagt West-Berlin, keinen Vorort. Es gab da nur wenige Fabriken, wo viele junge

Leute Arbeit hätten finden können, denn man konnte nur schwer Rohmaterial in die Stadt transportieren. Daher lebten da nur wenige junge Menschen. In Berlin wohnten damals meistens alte Leute, besonders viele Kriegswitwen, die nicht mehr woandershin umziehen konnten. Sie hatten kein anderes Mittel Geld zu verdienen als durch Zimmervermietung.

Der Protagonist konnte bis zum Ende der Erzählung kein passendes Zimmer finden. Der Schriftsteller selbst hatte aber schließlich Glück und bekam eine schöne Wohnung.